

仙覚の軌跡（一）

仙覚の生い立ち

仙覚は、現在の小川町の地に滞在して、『万葉集』を研究した鎌倉期の僧侶である。仙覚が著した『万葉集註釈』は、最初期の優れた注釈書として評価されている。以下では、仙覚が『万葉集』の研究に足を踏み入れた契機について考察していきたい。仙覚は、建仁3年（1203）、常陸国（茨城県）で誕生して、承元3年（1209）、7歳で『万葉集』の研究を志すようになり、建保3年（1215）、13歳で『万葉集』の写本を実見して、研究の成就を神仏に祈願したという。仙覚は、早くから『万葉集』に興味を持っていたらしいが、一体どのような文化的な環境のもとで成長したのだろうか。

宇都宮歌壇の影響

仙覚に大きな影響を与えたのが、鎌倉期に東国社会で存在感を発揮していた宇都宮歌壇である。宇都宮歌壇とは、鎌倉幕府の関係者を中心として構成された歌人の社会であり、下野国（栃木県）を本拠地とした宇都宮頼綱（蓮生）と塩谷朝業（信生）の兄弟によって創始されたという。常陸国出身の仙覚が、『万葉集』に目覚めた背景には、宇都宮歌壇の存在があったのではないだろうか。

笠間時朝との交流

笠間時朝は、常陸国笠間（茨城県笠間市）を本領とする武士で、朝業（信生）の次男に当たる人物である。宇都宮歌壇の歌集である『新和歌集』には、頼綱（蓮生）に次ぐ51首の歌が収録されており、時朝は宇都宮歌壇の中核として活躍した歌人だった。【史料1】は、『新和歌集』に載せられた仙覚の歌だが、笠間氏との関係に触れている点でも見逃せない史料といえる。

【史料1】『新和歌集』卷第三秋歌170（『新編国歌大観』第6巻、角川書店）

藤原時朝（笠間）すすめの三十首歌の中に 権律師仙覚
一七〇 秋をまつ あまのかはらの ひと夜妻 あさぎりかくれ たちかへるらん

詞書によれば、笠間時朝が整理して寄進した30首の歌の中に、仙覚が詠んだ秋の歌が含まれていたという。時朝は、仙覚が詠んだ歌を自身の手元に保管していたのである。では、仙覚の歌は、どのような経緯によって、笠間氏のもとに伝わったのだろうか。【史料2】は、仙覚の歌が詠まれた場について、一つの示唆を与えてくれる歌である。

【史料2】『新和歌集』卷第九雑歌上707（『新編国歌大観』第6巻、角川書店）

藤原時朝（笠間）の館にて題をさぐりて人人歌よみ侍りけるに、田家初秋
藤原蔭清
七〇七 あしびきの 山田のさなへ とりもあへず やがても秋に なるこひくなり

詞書によれば、笠間時朝の館に人々が参集して、秋を題材にした歌を詠んだという。笠間氏に関わる秋の歌という共通性から、仙覚も同じ歌会に参加して、歌を残した可能性が指摘できるだろう。この推定が正しいとすれば、仙覚は笠間氏の館に出入りする歌人だったことになる。常陸国で生まれた仙覚は、宇都宮歌壇を構成する一員として、同郷の笠間氏と交流していたのである。

源親行との交流

源親行は、東国社会で歌を指導する立場にあった歌学者で、宇都宮歌壇でも活動した人物である。『西本願寺本万葉集』巻一奥書によれば、幕府の将軍だった九条頼経に命じられて、親行が『万葉集』を校訂して、その写本を利用して仙覚が校訂を進めたという。親行は、『万葉集』の検討を進めた研究者であり、その事業を引き継いだのが仙覚だったのである。親行と仙覚は、宇都宮歌壇に属する歌人であるのと同時に、『万葉集』の研究という面でも関係を結んでいたと考えられる。

万葉集との接点

このように、仙覚は、宇都宮歌壇の影響を受けながら成長することで、『万葉集』の魅力に惹かれていったと推察される。仙覚は、やがて小川町の地を訪れて、『万葉集註釈』を完成させるが、その前提となる文化的な素養は、宇都宮歌壇の人々と交流する環境を通じて磨かれたのである。